民報サロン

いつか娘も

丸山　美佳子

「今日の宿題は二の段と三の段なんだ」と小学二年生の娘が帰ってくるなりそう言いました。「さんいちがさんさんにがろく　さざんがきゅう…」覚えたての九九を一生懸命暗唱しながら夫と一緒に聞いていた私は、何とも言えない違和感がありました。私が覚えている言い回し、節回しと娘のそれとが大きく違ったのです。「なんかちょっとおかしくない？」と娘の暗唱を遮りながら、私は自分の覚えている通りの九九を暗唱してみました。今度は夫と娘が変な顔。そして一言。「矢祭と飛騨は違うの。これは矢祭の言い方なの」。実はこんな驚き、違和感は初めてではありません。例えば、娘がようやく言葉を発するようになった時。保育所に入ってお友達と会話をしていた時。娘が他の子と同じく矢祭の方言やイントネーションをごく自然に覚え、使いこなしている様子を見て、これまで何度も「私から生まれたはずなのに」と思ったものです。

あらためて考えると、飛騨からやって来た私が当たり前に使う方言や何げない習慣は、先祖から受け継いだ「血」がそうさせていると思い込んでいたかもしれません。半分は飛騨の血が流れる娘。私と同じ言葉、習慣が自然に身に付くだろうと、なんとなく漠然と思っていました。が、実際には娘は矢祭の自然や人に囲まれて「矢祭の子」らしく元気に育っています。私が飛騨でそう育ったように、娘も矢祭の言葉や習慣を身に付けていくんだなあということが、「私と娘は違うんだ」とちょっと寂しくもあります。

三月十一日以降、たくさんのことがありました。その中で強まったのは「ふるさとへの思い」でした。私自身、「福島が好き」「福島で生きていく」とここまで強く感じるようになり、一方で自分の故郷への思いがふとした時の心の支えになっていることに気付いたのは、震災がきっかけになっていることは間違いありません。

娘がこの先成長し、どこで根を下ろして暮らしていくかは分かりません。でも、どこで暮らすにしてもその地にどっかりと根を張り、困った時に矢祭での暮らしが彼女を支え、それを誇りに感じられるような、そんな毎日を過ごさせてあげられる親でいたいなと感じています。

「味」もその一つ。わが家で寒くなると作るのは「蒸し寿司」。酢飯の上に具を乗せ、蒸し器、またはラップをしてレンジで全体が熱くなるまで蒸すだけの簡単な料理。ちらし寿司の具になるものだったら、生ものを除き大体なんでも合いますが、わが家ではシイタケの甘煮の細切りと、ツナ缶で作ったでんぶ、それにたっぷりの金糸玉子を必ず入れます。丼に盛り付けてもいいのですが、できれば木のせいろに直接盛り付けて蒸すと、木の香りが酢飯に移って豪華な雰囲気になります。湯気が上がった温かい酢飯は身体だけなく心もほかほか温めてくれます。

いつか娘も、私や夫の後ろ姿を思い出す時が来るでしょう。そして、その時に楽しい思い出とともに懐かしい風景や味が一緒に思い浮かんでくれたら、こんなうれしいことはありません。

（矢祭町東舘、「さかな家」おかみ）